

多摩美術大学芸術人類学研究所+芸術学科 21 世紀文化論 共催
第 1 回「記憶の道」シンポジウム「On the Road 越境するイメージ」

【 発表要旨 】

①「途中と未知」 | 榎木野衣

これまで IAA が掲げてきたシンポジウムのテーマ「土地と力」は、ひらがな書きでは「とちとちから」となり、全体でひと綴りの概念となっていたように思う。今回からその発展形として「記憶の道」が始まるわけだが、個人的にはこれを「土地と道」と呼び替え、やはりひらがなで「とちとみち」と記し、新たなひと綴りの概念として考えていきたい。「とちとみち」はたぶん「途中と未知」とも読み換えられる。そうした「道のり=未知のり」について今回発表を試みる。

②「“地場との交接”を媒介するアートとデザイン」 | 佐藤直樹

研究部門（「地場との交接：領域を横断する〈原初行為〉としての」）の経過報告として、「東京ビエンナーレ」でのリサーチや制作の報告を行います。また、関連する千葉での活動、北海道での交流にも触れながら、それぞれの地場で人が「他なるもの」と出会う際の「路（みち）」のあり方について考えます。

③「雷が通る」 | 港千尋

電光石火というように、稲妻は瞬間に生まれて消える現象である。火の起源神話から電流の研究や写真による捕捉まで、人間を刺激し続けてきた雷は、シンボルとしても特異な生命力を持っている。古代と現代を結ぶ〈道〉としての雷を、旅の途上から報告する。

④「旅の映画がたどる道」 | 金子遊

タイ&ラオスの森に住む遊動民を追いかけた、映像人類学的なドキュメンタリー『森のムラブリ』が一般公開されてから 2 年半。映画はマケドニア、メキシコ、タイ、カンボジア、東京、横浜、大阪、京都、沖縄といった土地を巡回し、監督した僕も一緒に旅してきました。「旅の映画」が「映画の旅」を続けるうち、その土地によって異なる捉えられ方をし、見た人によって異なる見解が与えられ、植物のようにぐんぐん成長していった過程を報告します。

⑤ 「黒曜石の道」 | 安藤礼二

原初の人類は未知なる大地を求めて移動し、環境に働きかけ、芸術作品を残した。考古学と人類学の交点から人間にとっての原型的な生活と表現の諸相を探る。

⑥ 「中世ヨーロッパの道と聖堂美術」 | 金沢百枝

古代ローマ時代、ヨーロッパ中にはりめぐらされた道路網は、帝国崩壊後もヨーロッパの人々に使われ続け、その一部は巡礼の道ともなりました。その道沿いには聖堂が建てられ、そこを文化がゆきかい新しい美術が形成されました。発表では、町のなかの人の動線を遮ってしまった聖堂建築や、聖地への巡礼路によってもたらされた聖堂美術の変化についてお話ししたいと思います。